

修理工事こぼれ話②⑥ 阿蘇神社に残る江戸時代の棟札

建物を新築・修理した際、縦に細長い板に新築・修理の記録を墨で書いたものを作ることがあります。この板のことを棟札（むなふだ）と言います。歴史的建造物の来歴を調べるときに棟札が残されていますと、建築年や工事に関わった方々のことなどが判明しますので、棟札はとても貴重な史料（しりょう）と言えます。阿蘇神社にも様々な建物の様々な棟札が残されていますが、江戸時代に作られた棟札も2組残されています。今回はそれらの棟札を紹介します。

1. 一の神殿棟札

一の神殿の棟札は2枚で1組となっています。1枚目の表面（おもてめん）と2枚目の表面に連続した文章が書かれており、2枚目の裏面（うらめん）には実際にこの棟札に墨で文章を書いた当時の神職さんの名前が書かれています。



第壹宮棟牌

我阿蘇社之宮宮也効 皇宮之制每次三十三年 奉 勅必改造例普課國中家取棟別錢以充其費天文年間宮殿悉羅災于時
 闖國擾乱費用不能供焉家宰甲斐親直請之惟豊卿姑且嘗假宮以待治平然後騷乱愈劇吾家尋衰自茲以降終無復舊之期者
 三百有餘載有時僅修其頽壞而已矣先君子惟馨卿居常深慨之蚤歲既有復舊之志雖然時未至不成其志而沒後十餘年祠官筮
 忠規等有特所建議因請之國府府許之實為天保三年壬辰之冬也然天文以降棟別之例久熄用度亦不備加之比年荐饑恐費役或煩
 民瘼周旋亦經數歲丁酉之秋有年民人幸奮効其力於茲即舉事以從民望更依棟別之例普令家別調其役而用度既足十年
 己亥之春始起役遐邇聞之不招子來歡呼踊躍以就其役今茲十一年庚子冬十一月二十有七日第壹殿先成蓋初親直之宮假宮也本殿之

一の神殿棟札 1枚目表面



南別造一社謂之南四宮今乃合一之從舊制也嗚呼殿宇崢嶸椽梁之偉麗炳焉光於前古煥乎耀於今代徃將復舊觀而萬世无疆焉云爾

于時天保十一年歲次庚子冬十一月二十七日

大宮司從四位下阿蘇公惟治謹記

祠宦五太夫山部經宗蒙
命精恐誠惶謹而書

一の神殿棟札 2枚目表面（右）と2枚目裏面（左下）

表面の文章は、当時の阿蘇神社大宮司である阿蘇惟治が、天保11年11月27日の日付で書いたものとして墨書きされています。一の神殿は天保10年（1839）3月から造営をはじめ、天保11年（1840）年3月に建物主要部組み立ての完了を意味する棟上（むねあげ）〔上棟（じょうとう）とも言います〕がなされています。その後完成したのち、上遷宮という祭神を遷座する儀式を天保11年11月28日に行っていますが、棟札の日付はこの上遷宮の前日にあたります。書かれている文章は、戦国時代にひとまず仮に建てた社殿群を300年近く使い続けていたが、ついに仮ではない本格的な社殿群の造営が始まり、最初の1棟目である一の神殿が完成したことをとても喜んでいる、といった内容になっています。

なお、この1組の棟札は、国指定重要文化財である一の神殿の附指定（つけたりしてい）という付属的な指定がなされており、一の神殿の価値を高める一役を担っています。

2. 文久2年（1862）造営拝殿の棟札

今回の熊本地震で倒壊した拝殿は昭和23年（1948）に竣工した建物でしたが、その1代前の拝殿は文久2年（1862）に建てられたものでした。建物自体は残っていませんが棟札のみ残されており、造営の記録を今に伝えています。



文久2年造営拝殿の古写真

こちらは複数枚ではなく1枚の棟札です。表面には中央に神様の名とその神様への願いの文を書き、その両脇に文久2年1月28日の日付が書かれています。おそらく竣工の日付だと思われます。そして中央下に大工棟梁の名が書かれています。裏面には、右上に藩主の名、左上に大宮司の名、その下に造営奉行である神職さんの名が書かれています。そしてその下には大工棟梁をはじめとする職人さんたちの名が数多く書かれています。



天四柱尊
奉祭祀清浄棟天長地開工準術壘
文久二年
正月廿八日
棟梁
岡田禎吉藤原清重
敬白

文久2年造営拝殿棟札 表面

國君 細川越中守慶順朝臣

大宮司 阿蘇公惟治

御造管奉行

宮川駿河山部経連
宮川但馬山部融
宮川美濃山部経順
宮川安藝山部宗彦

棟梁

四部一 岡田禎吉
脇棟梁
宇土大見村 藤七
同
宮地 兵四郎
同 佐藤作太
同 重太郎
同 大作
同 山部源三郎
同 勝三郎

役犬原

九郎兵工
宮地 常八
豊前中津
茂工門
同 傳八
同 重平
同 壽一郎
同 九市
同 馬太郎
同 繁太郎
同 猪太郎

鶴崎 猪之助

同 犬八
同 嘉市
同 粉師
坪井
鳥町 義三郎
山田 角兵工
同 榎方棟梁
宮地 幸次郎
四部一 新吉
同 鶴崎 貞五郎

鶴崎

同 沢次
同 龜太郎
同 喜市
同 壽市
同 幸次郎
同 才五郎
同 儀作
同 九市

石工

清次郎
甚太



文久2年造宮拝殿棟札 裏面

ちなみに、棟札の表・裏面につけられた横材は、中央で縦に割れてしまったのをいつの年代かに補修したものです。

職人さんの肩書には何種類かあります。棟梁岡田禎吉から嘉市という職人さんまでの21名は大工さんだと思われます。その次の2名は粉師であり、おそらく「そぎし」と読みます。拝殿は当初は柿葺（こけらぶき）という薄い板を重ね合わせた屋根であり、その屋根を葺いた職人さんなのではないかと思われます。その次の11名は杣方棟梁（そまかたとうりょう）であり、山から木材を伐採したり伐採した木材を大工さんが加工できるように製材する職人さんたちであると思われます。最後の2名は基礎の石などを加工して据え付ける石工（いしく）さんとなっています。細川藩の飛び地である鶴崎（鶴崎、現大分市）の職人さんも大勢参加していたようです。

ちなみに、棟梁の岡田禎吉は、神幸門・還御門を造営しています。また、脇棟梁の藤七と大工の重太郎は神殿・楼門造営にも参加しており、脇棟梁の兵四郎は楼門造営にも参加しています。

3. 棟札の比較

以上2組の棟札を紹介しましたが、一の神殿の棟札に書かれた内容は、

- ①造営の経緯
- ②上遷宮の前日の日付
- ③大宮司の名
- ④実際に墨で書いた神職さんの名

ですが、文久2年造営拝殿の棟札に書かれた内容は、

- ①神様の名とその神様への願いの文
- ②おそらく竣工の日付
- ③藩主の名
- ④大宮司の名
- ⑤造営奉行の名
- ⑥大工棟梁含む職人さんの名

となっており、この2組の棟札は書かれている内容がかなり異なります。拝殿棟札のほうが一般的な構成であり、一の神殿棟札のほうはかなり特殊な構成といえます。一の神殿は現在まで残る阿蘇神社社殿群の取り掛かりの造営であり、当時の大宮司である阿蘇惟治の、造営に対する並々ならぬこだわりや熱意の表れなのかもしれません。

今回紹介した棟札のうち一の神殿の附指定である棟札1組は、熊本市内にある肥後の里山ギャラリーにて9月30日より開催の展覧会「復興のシンボル 熊本城・阿蘇神社」に出展されており、実物をご覧いただけます。この機会に是非ご覧になっていただけたら幸いです。会期は令和元年（2019）11月16日（土）までです。